



Title	古代西アジアの方舟伝承：シュメールから古代イスラエルへ
Author(s)	桑原, 俊一
Citation	基督教學, 46, 1-27
Issue Date	2011-08-30
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/47484">http://hdl.handle.net/2115/47484</a>
Type	article
File Information	SC46_001.pdf



[Instructions for use](#)

## 古代西アジアの方舟伝承

— シュメールから古代イスラエルへ —

桑原 俊一

はじめに

洪水伝説は世界各地に共通する神話ジャンルと言えよう。J・G・フレーザーは『旧約聖書のフォークロア』において世界各地の洪水伝承を収集した。<sup>1)</sup> 彼によれば、其々の伝承は独自にかつ個別に発生したものであるのか（個別発生説）、ある伝承の影響下に伝播していったものであるのか（伝達説）、いずれかに依拠して説明することも無益としながらも、バビロニアの大洪水物語と『旧約聖書』における大洪水物語、つまり「ノアの箱舟物語（創世記）六章（九章）」の類似性を認め、バビロニアの洪水物語と広範な伝播の可能性を排除しない。不幸な汎バビロニア主義はさておき、欧米文化の基軸をなす『聖書』に記述された洪水物語はその主題の親和性に鑑み様々な視点から考察されてきた。

古代西アジアの文化は近年夥しい数の粘土板の発掘と地道な公刊によって新たな文字情報を大量に提供している。考古学的・文献学的進展に伴い、『ギルガメシユ叙事詩』の場合、バビロニアにおける異なる地域と時代に属する諸版やフルリ語やヒッタイト語版などに加え、エマルやウガリットといったシリア地域からも諸版の断片が明らかにされることで、フレーザーが考えていた枠をはるかに超えた伝播の議論が進行してきたといつてよい。

『聖書』と方舟伝承に関していえば、(一)、聖書の伝承をアブラハムに遡らせ、聖書から西アジアの諸伝承が形成

されたとする説(二)、メソポタミアの伝承から聖書を含め西アジアに伝播していったと解する説(三)、メソポタミアと聖書の伝承は個別の伝承を共有しているとする説、といった諸説に分類できよう。

本稿では広範な諸説の解説や検証ではなく、古代メソポタミアに典型的な洪水物語を概観しながら、『旧約聖書』「創世記」の洪水物語における文学的枠組みを検討するとともに、その際に自然環境や風土といった要因がどう聖書文学に反映したかを検討課題とする。聖書の編集者たちがなぜ洪水物語を原初史に組み入れたのか試論的考察を加えたい。

### 一、シュメールの洪水物語<sup>3)</sup>

粘土板は表裏三欄ずつ合計六欄に書かれているが、残念なことにその四分の三以上が破損していて、物語の全体像を把握することは困難であると言わなければならない。ただアッカド語で書かれた洪水物語『アトラ(ム)・ハシース物語』や『ギルガメシ叙事詩』に出てくる洪水物語の類似性からすれば枠組みは同様であった可能性は高いといえよう。実際、シュメール語によるこの大洪水物語は、既にシュメールの都市国家がその勢力を歴史から失う前二千年期に入ってから流布した、といわれる。M・シヴィルはこの洪水物語をイシン時代(前二〇〇―一九世紀)になって一般化されたとみる<sup>4)</sup>。しかしシュメール語版「洪水伝説」は古バビロニア時代後期(紀元前第二〇〇〇年紀前半)に制作されたとされる。

三七行にわたるテキストの破損のあと、神々は相談して言う。人間を破滅、つまり洪水から救済するなら、人間は都市を築き神々のために神殿を造営するだろうと。

物語は天地創造から人類滅亡決定に至るまでの出来事の回顧を叙述する。アン、エンリル、エンキ、さらにニンフルサグ女神が人間と動物さらに植物を創造する。欠損部分に続き大洪水以前から存在したといわれる五都市が建設され其々の町に神々が割り当てられる。これらの最初の町エリドゥは指導者であるヌディンムドゥ(エンキ)に与え、

二番目の町バドゥティピラはヌギグ（イナシナ女神）に、三番目の町ララクはバビルサグ（エンリルの子）に、四番目の町シッパルは太陽神ウトゥに、五番目の町シユルツパクはスドゥ女神に与えられた。

ここから洪水物語の描写に移る。神々は人類滅亡計画について議論した。最終的にアンとエンリルの名において大洪水を送ることが決定される。一度、議会で決定されたことは実行されなくてはならない。

主人公はジウスドゥラ (zi-u-sud-*ra*) 「長き日々の命＝永遠の命」の名を持ち、彼はまた神官でもあった。<sup>(5)</sup>

「謙虚に従順に、そして怖れに満たされながら、

毎日毎日いつも」 』していた。(一四七～一四八行)

ジウスドゥラはきわめて敬虔な人物であった。また彼は慎み深く壁際でエンキの大洪水襲来のお告げを聴く。

「ジウスドゥラはその傍に立って、聴」いた」

側壁の左手に彼は立った。」

……

人類の種を減ぼすことが、

「神々の」会議の決定、言葉なのだ。」(一五三～一五八行)

ジウスドゥラは巨大な舟を造り、大洪水に備える。

「巨大な（破壊）力を有する大風と台風がすべてともに在った。

洪水が〈首都〉の上を暴れすぎた。

七日七晩、

洪水が国中で暴れすぎてから……」（二〇一〜二〇四行）

太陽（ウトウ）の光が巨大な舟の中にさし込んだので、ジウストウラは窓を開き、太陽（ウトウ）の前にひれ伏した。大洪水の水が引いたので彼は舟から出て神々に動物犠牲を捧げる。

最後の段落では、アンとエンリルがジウストウラに神と同じよう長寿（神のごとき永遠の命）を与え、人間を始め動物の種（子孫）を救済したという理由から太陽の昇る土地ディルムンの地に住ませたこと、が語られる。

#### 文学的枠組み

- （一） 天地創造から人類滅亡決定に至るまでの出来事を回顧する
- （二） 最初の五都市の建設
- （三） 洪水による人類滅亡計画…一度決定された計画は実行されなくてはならない
- （四） 主人公の登場とエンキの秘儀…神々のうちエンキは人類滅亡計画に疑問を抱く  
敬虔な人物であるジウストウラは、慎み深く壁際でエンキの大洪水のお告げを聴く（巨大な舟を造り、大洪水に備えたことが述べられていたはずである）
- （五） 大洪水 大洪水は七日七晩暴れまわった
- （六） 洪水の期間…七日間

(七) 動物犠牲…ジウストウラは牛を殺し羊を（屠殺する）

(八) 洪水終息の確認…大地から動物が芽生える

(九) ジウストウラと舟に残されたものはデイルムンの地（楽園）に住まう

## 二、『アトラ・ハシース叙事詩』

『アトラ・ハシース (Atra-hasis 最高賢者) 叙事詩』はテキスト研究が進み欧米圏では新たな出版もなされてきた。

この作品は前一六三五年頃——標準版『ギルガメシュ叙事詩』に先立つ五〇〇年ほど前——に編纂され、当初は三枚の書板に二二四五行ほどであったが、今日では全体の三分の二ほどのテキストが復元可能となっている。『アトラ・ハシース叙事詩』は人間の創造物語と洪水物語を主要テーマとし、『エヌマ・エリシユ』（宇宙開闢神話）や『ギルガメシュ叙事詩』とならぶ長編物語である。

叙事詩は神々の時代から始められる。神々の社会は上位の神々（アヌンナキ）と低位の神々（イギギ）に分かれていた。低位の神々は地上の労働に従事し、上位の神々を支えていた。時がたち、低位の神々の労働はもはや忍耐の限界を越えてしまい、上位の神々に不満と反旗を翻す。天上の神々は事の重大性に何も気づいていない。これを察知したエンリルは武器を取り戦に備えて、イギギたちの訴えを聞き、その解決方法が探られる。ここで知恵の神エア（エンギ）の出番となる。エアの提案は解決策として人間を創造することであった。それはひとえにイギギの苦役や強制労働<sup>⑨</sup>を人間に肩代わりさせることに他ならなかった。

人間の創造から一二〇〇年が経ち、国土は広大になるにつれて人口も膨大になった。そのため神々の世界にも人々の騒々しさ<sup>⑩</sup>が悩みの種となり、睡眠が取れないのだという。エンリルは人々を絶滅しようと決断する。そこで嵐と雷の神アダドに命じて雨を降らせず、人間の食糧を断とうとする。しかし知恵と魔術の神エアはすべてを予知できる神

であった。アトラ・ハシースがエアの助言を得て、エンリルの送る疫病に対し疫病神ナムタルを懐柔したため人類は生き延びる。また一二〇〇年後エアは日照りと飢饉に介入しアダドを取りこみ人類を絶滅から守る。人間はアダドの神殿を建て、彼に献納をすることで雨の恵みを得ることができた。ついに神々は人間を絶滅する決定を下す。エンリルは洪水によって殲滅を図ろうとする。

洪水物語は第三の書板に記されている。冒頭一四行にわたる欠損の後、エア（エンキ）がアトラ・ハシースに方舟建造のお告げを語る。

「注意を向けよ。

壁よ、私に聴け。

葦の壁よ、わたしのことは全てに注意を向けよ。

家を壊して、舟をつくれ。

財産を捨てて、

命を保て。」（第一欄一九～二四行）<sup>(1)</sup>

方舟の設計図についての叙述はないが、『ギルガメシユ叙事詩』との並行記事から立方体であることが分かる。エアはアトラ・ハシースに七日に及ぶ大洪水の襲来を告げる。彼は鳥類、諸動物と家族を乗船させた。

天候は急変して空が破られるかのように大雨が方舟を襲う。嵐と雷の神アダドは唸り声をあげ風は荒れ狂い、綱は断ちきられ、舟は解き放たれる。

この光景に接した女神ニントウ——人間を創造した——はアヌの造った大蠅どもに近づき、神々の前で、不平を言

い、悲嘆にくれる。七日七晩の間、洪水が大地を襲ったが方舟は耐えて残った。

「どこに命は行ってしまったのか。」

「どうして人間は絶滅から生き残ったのか。」(第六欄九〜一〇行)

エンリルはなぜアトラ・ハシースを始め人類は生き残ったのか、とエア(エンキ)に詰問する。あつさりエア(エンキ)はその策略をめぐらしたのは自分であることを認める。そして物語は終幕に向かう。人口過剰にどう対処すべきか、その手立てが叙述されていたと思われる。

「加えて、人々のうちに第三の群をあらしめよ。」

人々の中に子を生む女と子を産まない女とを(あらしめよ)。

パーシットウ悪鬼<sup>(13)</sup>を人々の中にあらしめよ。

子を奪い去るため

その(子)を産んだ彼女の膝から

任命せよ。ウグバブトウ女祭司たち、エントウ女祭司たち、

とエギツイートウ女祭司<sup>(14)</sup>たちを。

彼女たちはタブーとなりましよう。

(そして)子の誕生は断ち切られよう。(第七欄一〜九行)



後述する『ギルガメシュ叙事詩』と『アトラ・ハシース叙事詩』における洪水物語を大観して明瞭なのは、前者は後者を下敷きにしていていると思われることである。とはいえ『ギルガメシュ叙事詩』の編集者はそのままでなく何がしかの削除・変更を加えたことも認められる。物語の終局部分は大きく異なる。それは、最も興味あるのだが、第三の書板の結末部分、つまり第七欄に描写されている。それによれば、結局のところ、一方で人類は絶滅の危機から回避できたものの、他方で人口の増加に歯止めをかけることでエンリルと折り合いをつけている。この部分の詳細は、残念なことにテキストが破損し、いかなる方法で人口増加に歯止めをかけたのか、部分的な方法は明らかであるにしても、全体像を把握することは困難と言わなければならない。この問題は単に今日的意味での人口過剰問題と解すべきではない。確かに人口過剰問題はあつたにせよ、結果的に人間の寿命が短縮されたことを意味する。つまり神々の時代に近かつた王たちの統治年代は数万年であつたことを考慮すると、『アトラ・ハシース叙事詩』における洪水物語は人口を減少させるための方策に言及することで、いわゆる歴史時代の到来を告げているともいえる。

### 文学的構成

- (一) 人口の増加…人間の数は夥しくなり、神々は人間の喧騒ゆえに忍耐できなくなる  
疫病や旱魃、飢饉を放つが知恵の神エア（エンキ）の策略を得て人類は生き延びる
- (二) 絶滅宣言…ついに神々は人間を絶滅する決定を下す
- (三) 方舟の建造…エンリルは洪水によって殲滅を図ろうとする  
エアは葦の壁を隔てアトラ・ハシースに方舟建造を細部にわたって指示す
- (四) 搬入…アトラ・ハシースは家族を始め、地上の諸動物や鳥類を舟に乗せる
- (五) 洪水…天気は急変して空が破られるかのように大雨が方舟を襲う

(六) 洪水の期間…七日間

(五) 人口過剰への対処…どう対処すべきか、その手順が叙述されていたと思われる

人類は絶滅の危機から逃れることになるが、ただし人口の増加に歯止めをかけることでエンリルと妥協する

### 三、『ギルガメシウ叙事詩』<sup>(15)</sup>

『ギルガメシウ叙事詩』は多様な版が存在した。『ギルガメシウ叙事詩』の成立は、古バビロニア時代（前二〇世紀）に始まり中期バビロニア版（前一六世紀）、後期バビロニア時代（前二〇世紀）～新バビロニア時代（前七世紀末）さらにヘレニズム時代（～前三世紀）にわたって諸断片が出土している。古バビロニア版ではギルガメシウ伝承を材料に基本的構成は成立している。アッカド語版に加え、メソポタミア周辺地域から、各地の言語にも翻訳された<sup>(16)</sup>。もともとギルガメシウ王はすでにシュメール王朝末期に神格化されていたことがシュルパック（ファラ）出土の王名表（前二四五〇年頃）から窺われる。またシュメール語で書かれた一群のギルガメシウ物語（シュメール語では *Bit-gamash*<sup>(17)</sup> の存在が幾つも知られている。最終的にはこのシュメール語諸作品の内『ビルガメシウとフワワ』、『ビルガメシウ、エンキドゥと天牛』と『ビルガメシウ、エンキドゥと冥界』が採用された。本稿が対象とする書板は『ビルガメシウ叙事詩』のうち第十一の書板に当たる大洪水物語である。これは標準版において初めて『ギルガメシウ叙事詩』を構成するテーマとの関係で付加された可能性もある<sup>(18)</sup>。

洪水物語は元来ギルガメシウ諸伝承に内包されていたわけではない。『ギルガメシウ叙事詩』の洪水物語は前項で取り扱った『シュメール語洪水物語』や『アトラ・ハシース叙事詩』と同系統に属する<sup>(19)</sup>。洪水物語を概観しておこう。ギルガメシウはついに舟師ウルシャナビの「死の海」を渡りウトナピシュティムとの邂逅を果たす。ギルガメシウは懇願して彼と変らぬ容貌のウトナピシュティムがなぜ神々の一柱に列せられたのか、その経緯を質す。

ウトナピシユティムはその秘密を語り出す。それによれば、アヌをはじめとして、エンリル、ニヌルタ、エンヌギ（アダド）とエアが集い地上に洪水を送って人間の滅亡を決定する。ただその中で思慮深いエアだけが人間救済の手立てを備える。エアは舟を建造し命あるすべての種をその中に詰め込むよう指示する。

「葦屋よ、葦屋よ。壁よ、壁よ。

葦屋よ、聞け。壁よ、悟れ。

シルツパクの人、ウバル・トウトウの息子よ、<sup>(2)</sup>

家を壊し、方舟を造れ。

持物を放棄し、生命を求めよ。

財産を厭い、命を生かせ。」（二一～二六行）

方舟は長さと同幅は等しい立方体として造られ屋根が葺かれる。エアのウトナピシユティムへの指示と舟の構造が示される。

九部屋を持つ七階建ての立方体の舟を造った。舟は念入りに多くの労働者をつぎ込んで造られていく。完成するとその中に自分の家族、技術者たち、生けるもの全てを積み込んだ。太陽神（シヤマシユ）のことばに従い、舟の戸は閉じられる。

先導神が行き、天に張られた大水の堰は切られる。瞬時の静けさが訪れるや大地は破れ暴風とともに大洪水が襲ってきた。神々でさえ怯え、うずくまり、女神の絶叫と嘆き声があがった。七日七晩にわたって風が吹き、大洪水と暴風が大地を襲う。

七日目になって大洪水は静まり退き、沈黙が大地を覆っていた。全人類は粘土に戻ってしまっていた。ウトナピシユティムは窓を開けると光を受けた。彼は跪き泣いた。遠くに陸地が見え、方舟はニムシユの山に漂着して動かなかつた。

「七日目になって、

わたしは鳩を放つた。

鳩は飛んでいったが、舞い戻つてきた。

休み場所が見あたらずに、引き返して来たのだった。

わたしは燕を連れ出し、放つた。

燕は飛んでいったが、舞い戻つてきた。

休み場所が見あたらずに、引き返して来たのだった。

わたしは鳥を連れ出し、放つた。

鳥は飛んでゆき、水が退いたのを見て、

ついでに、身繕いをし、

〔尾羽を〕高く掲げて、引き返しては来なかつた。〕（二四五〜一五四行）

ウトナピシユティムは山頂で犠牲と供物を捧げ、薫香を焚くと神々は蠅のように集まつてきた。協議もなく洪水を引き起こし、人間を滅ぼしてしまつたエンリルは、嫌がらせをうけるが、エンリルはエンリルで到着するやいなや方舟に眼をやり憤慨する。大洪水を免れて死から生き延びた人間の存在に気づいたからである。この仕業は思慮深く、知恵の神であるエアを除いて他に誰もいなかった。他方、エアはエンリルに洪水の他に別の手段はなかつたのかと詰

問する。

偉大な神々の秘密、つまり洪水を引き起こす決定はエア自身が明かにしたのではなく、ウトナピシテウム——ここではアトラ・ハシースの名称で出てくる——に夢を見せたところ、彼が神々の秘密を悟つただと弁明する。

ついにエンリルはウトナピシテウムと彼の妻を祝福し、神々に加え、遙か遠くの河口に住まわせた。洪水物語は、ウトナピシテウムが神々に列せられた次第を叙述して終わる。

物語は更に、結局のところ失敗するのだが、ギルガメシュへの七日間寝ずにいる試練の話と「老いたる人が若返る」草の存在——ウルクへの帰路つい草を泉の傍に置いて、水で身をきよめていた時、一匹の蛇が忍び寄り草は取り去られる——の話が挿入される。ギルガメシュは永遠の命を得られないまま長旅を経てウルクに帰還する。物語は第一の書板一欄一六から二二行と並行するウルクを讃えることばを舟師ウルシャナビに語つて閉じられる。

### 文学的枠組み

- (一) 神々の秘密・ウトナピシテウムは自分が神々に加えられた経緯を語る
- (二) 方舟・知恵の神エアの指示により、方舟を建造  
七階建て九部屋を持つ立方体の方舟
- (三) 搬入・家族他、技術者、あらゆるものの種を搬入
- (四) 洪水・天蓋から黒雲がたち雷鳴が轟き洪水が襲う
- (五) 洪水の期間・七日間
- (六) 洪水による絶滅・前人類は粘土に戻った
- (七) 方舟の漂着・ニムシユの山に漂着する

(八) 洪水終息の確認…鳩を放つが引き返す、燕も放つたが戻ってくる

鳥を放つともはや引き返さなかった

(九) 犠牲と供物…山頂で犠牲と供物を捧げ、薫香を焚く

(一〇) 不死の付与…エンリルはエアに説得され、彼に神々のような不死の生命を与える

(一一) 民話の挿入…不眠の試練と「老いたる人が若返る」草の在りか

(一二) エピローグ…ギルガメシュ失意のうちにウルクに帰還

#### 四、『聖書』「創世記」<sup>(23)</sup>

洪水物語は『創世記』における原初史といわれる非歴史的ないし神話的物語を構成するエピソードの一部である。六～九章の三章が当てられる。洪水物語は、聖書学的資料分析によればJ資料とP資料から構成され、複雑な編集がなされたことが窺われる。六章一～四節のJ資料は、神々の子らと巨人たちまつわる独立したエピソードとして把握する方が妥当と思われる。<sup>(23)</sup> 実質的な洪水物語は六章五節から八章二二節で叙述される。九章一～一七節はP資料であり洪水後の祝福と契約を記述し、洪水物語を締め括っている。

J資料による洪水物語とP資料の文学的枠組みを示し、二欄に分けて対比してみよう。

文学的枠組み…J資料とP資料の相違点と共通点を併記する。

## J資料

1. 人間の破滅

①人口の増加

地上に人が増え始める（六の一）

②悪が存在と洪水を送る決断

地上に悪が増す（六の五）

人を造ったことを後悔する（六の六一八）

③主人公ノアの登場

主の好意を得た（六の八）

2. 洪水宣言

①人類絶滅宣言

創造したものを地上から拭い去る（六の七b）

②方舟建造

（方舟に入る）（七の一b）

③つがいの搬入

淨い動物七対、淨くない動物一対（七の二―三）

## P資料

墮落と暴虐に満ちる（六の一）<sup>24</sup>

無垢な人で神と共に歩んだ（六の九）

巨大な三階建立方体の詳細な描写（六の一四―一六）

全て命あるものの雌雄一対（六の一八―二二）

④洪水の発生と継続期間

宣言から七日後、四〇日四〇夜雨が降り続く

(七の四)

⑤洪水による絶滅

地もろとも彼らを滅ぼす(六の二三)

地の面にいた生き物は全て地上から拭い去られた

(七の二一～二三)

3. 洪水の征服

①洪水の終息

四〇日後(八の六)

②終息の確認

方舟の窓を開けて鳥を放つ(八の七)、鳩を放つ(八の八)、七日後再び鳩を放つ(八の一〇)、鳩は嘴にオリーブの葉を加えて戻ってきた(八の一)

ノアが六〇〇歳のとき洪水が起こった(七の六)、深淵の源が裂け、天の窓が開かれた(七の一)<sup>(25)</sup>、翌年二月二七日には地上は乾いていた<sup>(26)</sup>、乾くまで一年間かかった(八の三)

地上の生き物は悉く息絶えた(七の二一)

一五〇日後水は引き出しアララト山に漂着する

(八の三～四)



③犠牲の奉げ物

ノアは祭壇を築き、焼き尽くす献げ物を捧げる

(八の二〇)

4. 新秩序

「人に対して大地を呪うことは二度とない」

(八の二二)

---

祝福と契約…「産めよ、増えよ、地に満ちよ」(九の一―八)、肉は命である血を含んだままでは食糧に  
してはならない<sup>(27)</sup>  
虹が全て肉なるものとの間に立てた契のしるしである  
(九の一六)

当該両資料を鳥瞰すれば、叙述の重複或いは類似と差異は明らかである。J資料とP資料の叙述の統合が最終的編集段階で行われたとき、旧約神学的問題はさておき、文学的枠組みにおいてメソポタミアの洪水物語との類似性は明瞭であり、何らかの借用が行われた可能性は否定できない。前三世紀のペロソスの洪水伝承がシユメールのそれに近いとすれば、より古いJ資料とP資料はいつ、どこで、どのようにして洪水伝承を獲得していったのだろうか。大変興味ある課題であるに違いない。ウガリット出土の洪水物語がメソポタミアからの伝承を継承しているとすれば、聖書の洪水伝承J資料とP資料もバビロン捕囚の時期を含め、メソポタミアからシリア・カナン地域に広がっていた諸版の洪水伝承と同系統を素材に編纂されたと見てよからう。<sup>(28)</sup>ただ古バビロニア時代(前二〇〇〇～前一六〇〇年頃)『ギルガメシュ叙事詩』にはプロローグや「洪水物語」はまだ取り入れられていない、と思われる。この事実は、メ

ソポタミアにおける文書伝承の伝統を考慮すると、最終的に旧約聖書の編集者はかなりの裁量を持って洪水物語を編纂し、原初史に組み込む余地があった、証左となる<sup>28)</sup>。

## 五、古代西アジアの自然と風土——破局的大洪水に関連して

### (一) 古代メソポタミア

ほぼ現在のイラクに相当する地方のかんりの地域は平原であり、南部は大沖積平野をなす。河口部はマシシュランド(大沼沢地)を形成する。チグリス河とユーフラテス河はその源流をトルコ西部のクルディスタン山岳地帯に持つが、国境を越えイラクに入るあたりからペルシア湾までの高低差は低い。チグリス河の場合、バグダット市からペルシア湾まで約九〇〇キロメートルでその高低差は三四メートルと極めて低い。ユーフラテス河ではシリア国境の河畔の町アブー・カマールから一一三〇キロメートル先のペルシア湾頭までの高低差は一七〇メートルにすぎない。こうした地理的条件によって上流からの大量の土砂が長年にわたり堆積し、肥沃な大地(大沖積平野)を形成していった<sup>29)</sup>。シユメール人はこの平野に当時革命的ともいえる灌漑設備を敷設し、水の制御を徹底して管理した農業と牧畜を基盤とする都市文明を築き上げた。

前三千年紀初頭にこの土地(シユメール)は驚異的収量倍率をもたらすムギ農耕を基盤に都市経済を発展させていた<sup>30)</sup>。シユメール初期王朝時代第一期(前二九〇〇―二七〇〇年)にはウルク(ワルカ)の人口は四万五千人にも達し、この人口を維持するために必要な耕地面積はウルクを中心に半径約一四キロメートルに及ぶという。初期王朝時代第三期(前二五〇〇―二三三〇年頃)になると南部の沖積平野にはユーフラテス河に沿って二〇以上の都市国家が成立していた。換言すれば、多くの都市国家の成立は同時に著しい人口の増大を意味する。人口増加を引き起こした理由について確実な証拠があるわけではない。人口増加現象はウバイド期の終わりからウルク期の初めに顕著になる。そ

の理由としては、天候による自然環境の変化、ある地域への集中的人口移動や半遊牧民から定住生活への移行といった複合的要因が上げられよう。<sup>(34)</sup>

人口の流入と都市の発展は、灌漑農耕の発展とは裏腹に脆弱な経済基盤の上に成り立っていた。度々襲ってくる飢饉、疫病と洪水は厄介な問題であった。<sup>(34)</sup>中でも河川の氾濫は大洪水となり諸都市を襲った。二〇世紀初頭、L・ウーリー卿はウルを発掘し、文化層が三・五メートルもの粘土層を形成していることを発見して、これこそノアの方舟が伝える大洪水であったに違いないと確信した。<sup>(35)</sup>その後の発掘によって同様な文化層の上に粘土層をもつ古代諸都市——ウル、キシユ、ウルク、シユルバック、ニネヴェ——が発掘された。結果として明らかになったことは、各都市における堆積層の層順も年代も異なり、歴史的に全地を破壊する大洪水の粘土層を確定することは困難であり、むしろこうした諸都市の発掘は局所的な洪水が諸都市を襲ったことを裏付けることになった。<sup>(36)</sup>古代メソポタミアの環境や風土を勘案すれば、とりわけチグリス河とユーフラテス河は、エジプトのナイル河と異なり、南部バビロニアやシユメールの地は春先（四月―五月）の増水期に運河は補助的な助けになったにしても、しばしば河川は氾濫して洪水となり都市を襲い耕地は冠水した。洪水に備えジクラット（聖塔）の基壇にはアスファルトで防水を施す必要があったほどである。人口の増大と河川の氾濫は砂防工事が脆弱であったこの時代を考慮すると、都市生活者と農民にとって最も脅威的災害であったに違いない。

## （二）古代イスラエル

イスラエルの自然と風土は東南アジアのモンソン地域と比較して圧倒的な違いは雨量に見出されるであろう。<sup>(37)</sup>前述したメソポタミアとは雨量の点では近似するにしてもその地理的条件は大きく異なる。大河に拓かれたメソポタミアに比べイスラエルの場合、レバノン地溝帯を流れるヨルダン川を除けば、いわゆる恒常河流は少ない。<sup>(38)</sup>ましてや肥

沃な大河が形成した沖積平野を持つメソポタミアとは根本的に異なる。

ヘブライ語の「最初の雨」は語根を「(矢)を放つ」に持ち、「射手」を含意する。つまりこの時期の雨は戦場で放たれる矢のように大地を的として突き刺すように降るのである。スコールのように短時間に地面を叩きつけるように降る。一時河流と呼ばれる川は、われわれには一般的にアラビア語のワデイの名称で知られるが、涸れ谷と訳される。雨の降らない乾期は石灰質の岩や地層がむき出しの乾いた無機質の谷である。更にヘブライ語には荒野や砂漠を表す語彙が六つほどあり、<sup>(39)</sup>こうした語彙の豊富さもイスラエルがいかにも雨量の少ない乾燥した大地であるかを示している。しかしいったん雨期に入り「最初の雨」が降り出すと鉄砲水となって谷を下る。涸れ谷は石灰質で覆われているために流れ込む雨を保水する能力を全く持たないのである。

古代イスラエルのみならずメソポタミアやシリア・パレスチナでは一般的に雨期の戦争はありえなかった。道路は道なき道となり、ぬかるんで兵士も戦車も前進出来なかったからである。そればかりか涸れ谷は大量の土砂を運び、道は寸断され行く手を阻んだ。もちろんこうした雨を戦略的に利用し戦いを勝利に導いた事例を聖書は記しているが、<sup>(40)</sup>これは例外的といえよう。雨は恵をもたらす一方で、やはり涸れ谷を一気に流れ下る濁流を想起させるもの、破壊的大洪水を表象させるものであったに違いない。

おわりに

西アジアに起源する大洪水伝承が古代メソポタミアで発見されて以来、『旧約聖書』におけるノアの方舟伝承と関連する研究は、考古学資料と文献学的テキスト分析の蓄積と相俟って大きな成果を上げてきた。本稿では伝播の経緯については検討しなかった。ノアの方舟伝承の場合、伝承の過程を仔細に検証するのは困難ではあるが、検討した文学的枠組みから少なくともシムメール洪水物語を含むメソポタミアの洪水伝承を継承していることは疑いない。

なぜイスラエルの編集者たちは洪水物語を旧約聖書に盛り込んだのだろうか。文学的視点から洪水伝承が歴史編纂的役割を担ったことはシヌメールの王名表との類似から明瞭であるといえよう。

その他に文書化して原初史に組み込んだ要因はないのだろうか。本稿ではその鍵になる要因を自然と風土という観点から検討した。歴史的にイスラエルの編集者たちはメソポタミア文学（叙事詩・神話）との接点を持つ機会を幾度となく経験していた。彼らは歴史を神の行為の実在化として記憶してきたのである。従って彼らはメソポタミアの洪水伝承を受容するさい、洪水は過去の歴史における悲惨で破局的出来事として記憶されたであろう。メソポタミアにおける大河の氾濫と洪水は彼らにとって歴史を画する終末的出来事として記憶されたのではないか。彼らが太古の方舟伝承を神の行為と位置付けることができたのは、まさに彼ら自身が置かれていた自然と風土によるところが大きいと思われる。いずれにしても神学的解釈は別として、イスラエル民族が洪水伝承を彼らの歴史的出来事として記憶に留めることが出来たのは、彼らが直面していた自然や環境という要因を抜きには考えにくい。編集者にとって方舟伝承は神話的物語というよりも、民族の歴史に神の行為を見る出来事として深く記憶されるべきものであったのではなかったか。日本では大災害が千年や百年単位で襲うにもかかわらず災害の記憶を歴史化することに希薄であったといえよう。むしろ大災害とは無縁と思われるイスラエルにおいて大洪水を歴史化し、神の行為を記憶する装置として理解したところにイスラエル民族の特殊性を見いだせよう。

## 注

学術雑誌等略記記号は(1)Martha T. Roth (et al.), *The Assyrian Dictionary of the University of Chicago*, Vol. 18 (Chicago, the Oriental Institute, 2006); (2) W. von Soden's *Akkadisches Handwörterbuch*, (Otto Harrassovits, 1966-1981); (3) R. Boger's *Handbuch der*

*Keilschriftliteratur*: vol. 1 (Berlin, 1967), 661-672. に準拠する。

- (1) J. G. Frazer, *Folklore in the Old Testament: Studies in Comparative Religion Legend and Law* (Macmillan and Co., 1918) は出版から六〇年後に翻訳出版された。江河 徹・秋山武夫・内田鎮人・古宮照雄・田島松二訳『旧約聖書のフォークロー』(太陽社、一九七九年) 第四章一六〇頁〜一〇二参照。
- (2) その他の周縁に伝播した古代ギリシアのアポロドロスが伝える「デウカリオン洪水神話」や前三世紀に書かれたバビロニアの神官でペロッソスによる洪水物語——断片しか伝わっていない——は本稿の対象から除いた。本稿では古代西アジアの洪水神話と聖書に伝わるノアの洪水物語に対象を限定し、それらの文学の枠組みと背景を考察対象とするからである。
- (3) テキストと翻訳や解説については五味 亨訳『洪水伝説』杉 勇編『古代オリエント集 筑摩世界文学大系 1』(筑摩書房、一九七八年) 二二〜一四頁、岡田明子、小林登志子『シュメール神話の世界』(中央公論新社、二〇〇八年) 四七〜七一頁参照。M. Civil, 'The Sumerian Flood Story, in: *Atta-Hasis The Babylonian Story of the Flood*' W. G. Lambert and A. R. Millard (Oxford: Clarendon Press, 1969), pp. 128-145; A. Heidel, *Gilgamesh Epic and Old Testament Parallels* (The University of Chicago Press, 1975), pp. 102-105. W. H. Römer, *Texte aus der Umwelt des Alten Testaments* (TUAT) III/3, s. 448-458; S. N. Kramer, 'The Deluge' in: *Ancient Near Eastern Texts Relating to the Old Testament* (ANET) ed. by J. B. Pritchard (NJ: Princeton University Press, 1974), pp. 42-44.
- (4) M. Civil, op cit., 139.
- (5) シュメール王名表によれば大洪水以前の最後の王であり、洪水は歴史編纂的役割を持つ。つまり洪水は新たな歴史を開始するために歴史を分断する機能を与えられている。大洪水以前の王たちの治世は数万年単位であるが大洪水以降は千年前後へと短縮される。G. F. Hasel, "Genealogies of Gen 5 and 11 and Their Alleged Babylonian Background," *Andrews University Seminary Studies*, 16 (1978), pp. 361-374; T. Jacobsen, *The Sumerian King List* (Illinois: University Chicago Press, 1939), pp. 69-77.
- (6) オマーン半島沖バレーン島と同定されてる。See G. Bibby, *Looking for Dilmun*, (New York: Knopf, 1969), p. 381. 関連する「永

- 遠く命」にこゝには C. C. Lambert-Karlovsky, "Dilmun: Gateway to Immortality," *JNES* 41, (1982), pp. 45-50. を参照。
- (7) W. G. Lambert and A. R. Millard, *Atra-Hasis The Babylonian Story of the Flood*, (Oxford University Press, 1969). 以下本書の参照は Lambert/Millard(以下略)。
- 日本語訳には、杉 勇訳「アトラ・ハシース物語」前掲『古代オリエント集』一六七頁～一九〇頁があるが、これは Lambert/ Millard の英訳を訳出したものである。本稿の日本語訳は筆者の私訳を用いた。拙稿「アトラ・ハシース叙事詩(Atra-Hasis) (四)」(『人文論集』北海学園大学人文学部、第四六号、二〇一〇年)、四一頁～七一頁参照。その他 E. A. Speiser, 'Atrahasis,' *ANET*, pp. 104-106, 補遺 21) 2) A. K. Grayson, pp. 512-514 がある。比較的近年の翻訳や解説は以下参照: R. Labat (ed.), *Les religions du Proche-Orient asiatique*, (Paris: Fayard/Denol, 1970); J. Bottéro, *Mythes et rites de Babylone* (Paris/Geneve, 1985), pp. 279-398.; S. Dalley, *Myth from Mesopotamia? Oxford World's Classics*, (Oxford University Press, 2000); W. von Soden, *Texte aus der Umwelt des Alten Testaments (TUAT)* III/4, (Güterstoh: Gerd Mohn, 1993), pp. 612ff.; W. L. Moran "Some considerations of form and interpretation in Atra-hasis," in *Language, Literature and History: philological and historical studies presented to Erica Reiner* ed. by F. Rochberg-Halton (New Haven, 1987), pp. 245-56; B. R. Foster "Atrahasis," in: *The Context of Scripture* Vol. 1, et al. by W. W. Hallo (Brill, 2003), pp. 450-453.
- (8) 神々の表記について。エア(エンキ)とある場合、括弧内の神名はシヌメール語による神名を示す。
- (9) *dullu, šupšikku (šupšikku)* これらの語彙は運河を浚渫したり、煉瓦を畚で担ぐ重労働や強制労働を意味する。
- (10) *hubūru, riḡnu* はかつて単なる人の騒音や叫び声を意味するものではなく邪悪な振る舞い、神々への反逆、つまり罪人と解釈する提案もあったが、テキスト解釈の誤解も指摘され、キリスト教を前提にした理解といわなければならない。See G. Pettinato, "Die Bestrafung des Meschengeschlechts durch die Sintflut," *Or* 37 (1968), pp. 165-200.; E. A. Spiser, in: *ANET*, p. 103.; W. L. Moran, "Atrahasis: The Babylonian Story of the Flood," *Bib* 52 (1971), pp. 51-61.
- (11) 標準版『キルガメシュ叙事詩』第十一の書板二二～三二行と並行する叙述が「アトラ・ハシース叙事詩」第三の書板第一欄

二〇～二六行に認められる。従って、ここでも方舟は立方体を取り、屋根で覆われていたと思われる。古代メソポタミアの神話には、このようにある一部分の叙述をそっくりそのまま借用するかそれに近似する叙述が確認できる。『アトラ・ハシース叙事詩』第三の書板第一欄十一～一四行は『ギルガメシュ叙事詩』第十一の書板五〇～五五行と、また『アトラ・ハシース叙事詩』第三の書板第五欄四二～四四行は『ギルガメシュ叙事詩』第十一の書板一六七～一六九行を参照されたい。See Lambert/Millard, p.160。これらの借用は『アトラ・ハシース叙事詩』と『ギルガメシュ叙事詩』に限って言えば、前述の並行部分では『ギルガメシュ叙事詩』の編集者は『アトラ・ハシース叙事詩』から借用したが、そのまま借用するというよりは適宜削除を施している場合も認められる。事例として『アトラ・ハシース叙事詩』第三の書板第四欄六～第五欄三六行と『ギルガメシュ叙事詩』第十一の書板一三三～一六二行が上げられる。See J. H. Tigay, *The Evolution of the Gilgamesh Epic* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1995), pp. 225-228, 237.

(12) 蠅の象徴的意味は明らかでない。蠅の象徴についてはS. Dallyの脚注四二を参照。いずれにせよ人間の死や都市の崩壊と関係づけられるか。See, A. D. Kilmer, "The symbolism of flies in the Mesopotamian flood myth and some further implications," in: *Language, Literature, and History: philological and historical studies presented to Erica Reiner*, pp. 175-180.

(13) 病魔を人格化したものに由来する。OBやそれ以降の医学、魔術や語彙リストに病気の一種として出てくる。しばしば赤子を取り去る(死産・流産)女悪鬼ラマシウトウの形容辞であったりする。See *RLA Band 10, Pasitu* pp.363-364; *Band 7, Lamastu* pp. 439-446.

(14) *ugabtu, entu, egisitu* は神殿に仕える女祭司たちで、通常子どもを産むことは許されていないかった。つまり*entu*-大祭司のように貞操を保つことが求められた。

(15) テキストと翻訳や解説等は月本昭男『ギルガメシュ叙事詩』(岩波書店、一九九六年)や矢島文夫『ギルガメシュ叙事詩』(ちくま学芸文庫(筑摩書房、一九九八年))を参照。本稿ではテキストの引用はほぼ月本訳に従った。近年二巻本からなる浩潮



ナチキストと解説を施した A. R. George, *The Babylonian Gilgamesh Epic* 〔カメシ〕。S. Dalley, *Myth from Mesopotamia*, pp.109-135.; K. Hecker, 'Das akkadische Gilgamesch-Epos' in: *TUAT III/4* 1994; E. A. Speiser, 'The epic of Gilgamesh' *ANET*, pp. 72-90.; A. Heidel, op. cit., pp. 80-93.

(16) 詳細な『ギルガメシュ叙事詩』の発見から成立史については月本昭男、『ギルガメシュ叙事詩』一八三～二〇七頁参照。See, A. R. George, *The Babylonian Gilgamesh Epic*, pp. 1-90.

(17) ギルガメシュの名称の意味はシュメール語の Bilgames 「祖先は若者」に由来するか。See S. Dalley, *Myth from Mesopotamia*, p. 322. Bil-gas-ga "elder, ancestor", mes, meš, "young man, prince" in: *Sumerian Lexicon*, ed. by J. A. Halloran, (Logogram Publishing: Los Angeles, 2006), p. 33a, 174b. 古バビロニア時代にギルガメシュの名で呼ばれるようになる。ビルガメシュの名はファラ文書(前二六〇〇年頃)に神格化されて出てくる。ギルガメシュ王の歴史性については確定できないもののキシユの王エンメバラギシの碑文が現れたこと(前二八〇〇～二五〇〇年の間)と考えられている。See S. Dalley, *Myth from Mesopotamia*, pp. 40-41.

(18) 月本昭男『ギルガメシュ叙事詩』二〇二～二〇三頁参照。

(19) 同上、三五八頁参照。Cf. T. Jacobsen, *The Treasures of Darkness* (Yale University Press, 1976), p. 210.

(20) 標準版 U<sup>4</sup>-napšim (ウトナピシテム) だが、古バビロニア版 Ua-napšim (ウタナピシテム) の語形で現れる。

(21) 「シュメール王名表」によれば王権は天からエリドゥを始めとして次々と移りシュルパツクに及ぶ。シュルパツクの第一の王ウバル・トゥトゥウ (Ubar-tutu) の時代に洪水が起こる。ただ別の「王名表」によれば洪水が起こったのはウバル・トゥトゥウの孫にあたるジウストドラの時代とされる。前述したシュメール洪水物語において洪水を生き延びたのはシュルパツクの王ジウストドラとしている。注五を参照。

(22) 日本語訳は主として新共同訳『聖書』(日本聖書協会、一九九五)に従った。

(23) C. Westermann, *Biblischer Kommentar: Altes Testament Genesis 1-11*, (Neukirchener Verlag, 1984), s. 491-517. 資料は洪水物語の序章

と見なすことができよう。なお資料分析についてはC. Westermannに従った。A・ヴァイザー監修G・フォン・ラート(山我哲雄訳)『ATD旧約聖書注解(1) 創世記』(ATD・NTD聖書注解刊行会、一九九三年)、一四一〜一八五頁参照。六の一〜四を含めJ資料による洪水物語の序言と取る場合もある。つまり六の一〜八を一単元と見なす。R・デヴィドソン(大野恵正訳)『創世記』①『ケンブリッジ旧約聖書注解』(新教出版社、一九八六年)、七五〜七八頁参照。越後屋 朗「創世記一〜一二」『新共同訳旧約聖書注解』(日本基督教団出版局、一九九六年)によれば六の一〜四節は最も神話的な特殊資料とする。三六頁参照。

(24) P資料はことばを神学的に用いる。六の一「暴虐」を原初史において初めて使用して人間の不法性を強調する。また六の一七では「洪水」を用いて、それが全世界に及ぶ破局的大洪水であることを示す。A・ヴァイザー監修G・フォン・ラート(山我哲雄訳)『ATD旧約聖書注解(1) 創世記』二〇一〜二一〇頁参照。

(25) 「深淵の源つまり混沌の海」原語テホームはバビロニアの創世神話「エヌマ・エリシュ」に登場する女神ティアマト(海神)と関係する。「天の窓」もバビロニアの宇宙観を反映している。蒼穹には原始の水が湛えられていて、窓が開かれると雨や雪となり地上に降ると考えられていた。

(26) 太陰歴では一年は三五四日なので二月一七日に一〇日を加えると太陽暦の一年となる。つまり洪水は一年にわたる大洪水であった。旧約聖書翻訳委員会 月本昭男訳『創世記』旧約聖書I(岩波書店、一九九七年)、注三、二二頁、注一〇、二四頁参照。

(27) レビ記一七の一〇〜一四、申命記一二の二三〜三四参照。

(28) W・G・ランバートによれば『聖書』がメソポタミア資料から洪水や創成神話を借用するようになったのは前一五世紀以前ではありえず、前一二世紀頃口伝様式で行われた。W. G. Lambert, "A New Look at the Babylonian Background of Genesis," *Journal of Theological Studies*, N. S., Vol 16, part 2 (1965), pp.287-300.

(29) 洪水物語の宗教史的諸研究の文献表と補遺C. Westermann, *Biblischer Kommentar Altes Testament Genesis I-II*, s. 519-522, 536-545.

参照。

- (30) チクリス河の語源はギリシア語であるが、シュメール語で *idj.digna*/*idgina* ( $\text{𒀭}$ ) *gina* と呼ばれた。その意味は「流れる水」なしし「ユーフラテス河に比べ」流れの早い川」であろう。アッカド語はシュメール語を借用して *idginat* を用いた。現代アラビア語では *Dijla* と呼ぶ。水源から河口まで一八五〇キロメートルある。ユーフラテス河はギリシア語に由来するが、シュメール語では *idBuranna* (UD.KIB.NUN) と呼ぶが、その意味は不明。アッカド語では *Pratu* と言いシュメール語からの借用語である。現代アラビア語はギリシア語を語源とする *al-Fat* が用いられる。水源から河口まで三五八九キロメートルと長い。
- (31) A. L. Oppenheim, *Ancient Mesopotamia*<sup>2</sup> (University of Chicago Press, 1977), pp. 40-42.
- (32) 前川和也「古代シュメール農業の技術と生産力」川北 稔ほか『シリーズ世界史への問い2 生活の技術 生産の技術』(岩波書店、一九九〇年)、四七〜七四頁参照。
- (33) 中田一郎『メソポタミア文明入門』(岩波書店、二〇〇七年)、四三〜五一頁参照。
- (34) 『アトラ・ハシース叙事詩』は文学的手法でこれらをエンリルが人間を滅亡させる道具として用いているが、この地域の自然現象を反映したものであることは明瞭である。
- (35) L. Woolley, *Excavation at Ur* (London: Ernest Benn, 1954). しかし彼は大洪水は局所的現象であり、諸都市を同時に襲う破局的な大洪水を意味しないことを認識していた。
- (36) L. R. Bailey, *Noah: The Person and the Story in History and Tradition* (University of South Carolina Press, 1989), pp. 28-38. 大破壊を引き起こす現象は大洪水ばかりではない。興味ある一例を上げるとすれば、満ち潮と地震による複合現象である津波であろう。大津波の破壊力は終末的現象とさえいえよう。しかしメソポタミアの諸都市を一気に呑み込む大破壊の存在を示す考古学的証拠は今のところない。
- (37) 雨期全体で降る量が多いと言われる北部のケナン山(九一七メートル)で七二八ミリ、エルサレムの山で五四五ミリ、死海の北端のエリコで一八一ミリ、南のアカバ湾に接するエイラートでは三〇ミリにすぎない。天水農耕には年間雨量二〇〇

ミリ以上を必要とするとされている。エルサレムから南のイスラエルは荒野や砂漠が広がり農耕は極めて限られた地域で可能であった。池田 裕『人間の世界歴史①旧約聖書の世界』（三省堂、一九八三年）、四六頁参照。

(38) ナアマン川、タニニーム、ヤルコン川が上げられよう。池田 裕「第一章 パレスチナの風土と生活」月本昭男、小林 稔 編集『現代聖書講座 第一巻 聖書の風土、歴史、社会』（日本キリスト教団出版局、一九九六年）、三三〇―三六頁参照。

(39) midbar, arabah, tohu<sup>2</sup>等。

(40) 士師記四―五章。カナンのシセラと女預言者デボラを士師として立てたイスラエルの戦い。降雨が戦局をイスラエル優位に導いた。